

活動名	団体名	特定非営利活動法人よもぎのアトリエ
中高校生を被災地の役に立てる人材に育てる事業:第2ステージ	地域	広島県広島市
	代表者	代表理事 室本けい子
	支援金額	25万円
活動概要		
<p>この事業は、不良や引きこもり青少年の居場所事業である『みんなが龍馬塾』の子どもたちを、東北被災地へのボランティア・学習旅行に引率したり、或いは被災地等からのゲスト講師を迎えて広島でイベントを行うことにより、東北被災地の方々に少しでもお役に立てる活動をしたり、被災地住民やそれを支援する人々との交流をとおして、東北被災地の復興に少しでも貢献する意識形成を促し、さらには東北に続いて大震災が懸念される南海トラフ地震の際に社会に貢献できる人材として育てるため行った。</p> <p>◆実施時期 夏期(平成25年8月3日～8月10日) 春期(平成26年3月20日～3月21日)</p> <p>◆参加人数 夏期15名(子ども6名、大人3名、訪問先大学関係3名、被災地3名) 春期40名(子ども20名、大人20名)</p> <p style="text-align: right;">参加総人員:55名</p>		



岩手県大槌町を訪問
「いま被災地で何が必要なのか」等の説明を受ける



宮城県名取市美田園第二仮設住宅団地の世話役のみなさんから、現状問題をうかがう



大阪府津波高潮センターで、過去の大震災や南海トラフで想定される津波等について学ぶ



紙芝居師三橋優子さんを基町に招き、手作りの紙芝居ワークショップ

◆実施に伴う効果

- ・25年度はテレビの地方報道番組で2度、全国報道番組で1度放送された。また、これまでの3年間(4年3カ年)で『みんなが龍馬塾』を訪れてくれた県外の方は、計15都道府県で延べ100人に及ぶ。加えて、平成25年秋からは広島県からも活動に支援していただいている。3カ年の活動成果がようやく評価をいただきはじめたと感じている。
- ・もうひとつの成果は、子どもたちの確かな成長である。3年前は、ここは確実に“非行少年と引きこもりの子どもの居場所”であった。しかし現在は違った姿を見せ始めている。引きこもりで中学へ3年間いかなかった子が、見事通信制の高校を3年で卒業でき、アルバイトもできるようになっている。親に見捨てられ家出をして高校退学した子が高校卒業程度認定資格をとろうと勉強をしている。中学時代鑑別所を体験した子が、今や大学受験を目指すまで(それも国立大学)の意識を持つようになっている。またその子につられて勉強したり、大学進学を考えるようになった子もいる。引きこもりの父親のことが心配で相談に来る親思いの高校生もいる。祖父母孝行を欠かさない子もいる。中学時代の学業はパツとしないかったが、高校へ入りアルバイトするようになってからは、アルバイト先の大人達から非常に高評価を受ける子もいる。こうした子どもたちの成長こそが一番の成果であると確信している。そしてその成長に、こうした「ボランティアツアー」体験が非常に大きく役立っていることを現場で強く感じている。可愛い子には旅をさせろというのが、空間移動を伴う異空間への旅・体験は、子どもたちに潜在する能力や感性を触発するのではないだろうか。これこそノマド・エデュケーションというべきであろう。

◆苦勞した点

- ・予算:活動には多大な出費が伴う。この助成では計上できないような細かい費用も発生する。そうした部分を賄うために通常事業に関する公的な助成を獲得するのが大きな課題である。
- ・地域の理解が乏しい。しかし25年度は地方局テレビ放送に2度、全国放送1度、計3度のテレビ放映があったことから、地域での評価は徐々に変化しつつある。
- ・しかし広島市行政からの評価は無い。同じ行政でも広島県からは評価もいただいているし、またテレビ局からの取材・報道が二度も入ったにも関わらず、市行政からのアプローチは全く無い。
- ・だからといって無理にPRすることは考えていない。これまでの3年間(4年度3カ年)で『みんなが龍馬塾』を訪れてくれた他県の方は、計15都道府県で延べ100人に及ぶ。地道な活動を続けていけば、広島市行政や広島市民の認知度も上がるものと確信している。

◆今後の課題・発展の方向性

2～3年前には“非行少年の居場所”というイメージが強かった『みんなが龍馬塾』だが、最近様変わりをはじめている。それはとりわけ3月21日の街頭紙芝居会を経験して以降のことだが、塾生達が勉強する機会が増えてきたのだ。中には大学受験のことを意識する子、高校卒業程度認定試験を受験しようとする子、高校卒業のためのレポート・宿題をやるようとする子が増えてきたのだ。これまで非行や引きこもりの子は、自分の将来に対してなかなか前向きに向き合えない傾向が強いことを感じてきたが、現在は明らかに昨年までとは違う意識がどの子にも育っている。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・『みんなが龍馬塾』で、子どもたちを連れて東北被災地に足を踏み入れたのは、これで4度目となった。その間に東北被災地の状況も移り変わって行くのが感じられる。当初は避難所や仮設住宅団地への訪問とそこでのお手伝い仕事が被災地の何処にでもあった。しかし現在はそろそろ仮設住宅から次の住いへの転居や、生活再建のための仕事探し等が被災地住民の関心の中心となっているようだ。
- ・『みんなが龍馬塾』だけでなく、全国各地の社協単位などのボランティアバスなどもまだ実施されているが、現地には「ボランティア仕事をしてくれるより、よく視察して被災地のことを他府県の住民に伝えて欲しい、或いは観光してお金を落としていくことで被災地復興面で貢献して欲しい」という声が少ないようである。我々『みんなが龍馬塾』の被災地ツアーも、こうした空気の変化を確かに感じた。
- ・被災地でボランティアというと、社会に聞こえはいいが、もうそろそろ被災地支援、或いは被災地とのつきあい方に関しては再考すべき時に来ているものと強く感じる。
- ・津波の被害の甚大さよりも、「生活再建ということがいかに大変なことか」という現実の問題は、子どもたちにも感じられたと思われる。なぜなら『みんなが龍馬塾』に通う子どもたちの多くは、経済的困窮度の高い家庭の子である。そうした人の苦勞や痛みには苦勞を知らない子どもたちより遥かに敏感であるから。